
遥かなる刻の中で

たるなま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遙かなる刻の中で

【Nコード】

N2181W

【作者名】

たるなま

【あらすじ】

仲間が次々と自分から離れ、最後は一人で元の世界にかえってきた白龍の神子、蓮水ゆき。しかし、自分ひとり助かっても意味がない。

「今度は私がみんなを助ける！」そう決意して戻って来た京で、再び坂本龍馬暗殺事件が起きる。しかしこんどはなんとか逃げのびたらしい。逃げた先の薩摩藩邸にいた坂本龍馬のそばには、見慣れない男がいた。どうやら、この男に助けられたらしい。

「この人は、陸奥出海。俺の親友だ！」

* 遙かなる時空の中で5と修羅の刻風雲幕末編の無茶なクロスオーバーです。ネタバレはや、世界観の独自解釈を含みます。
* 乙女な都が見たい一心で書きました。

ゆき、再び京へ。

ゆきはもう二度と、誰一人として失いたくなかった。

仲間たちが目の前で消えてしまうのを成す術もなく見ているしかなかった。いや 成す術はあったのだ。自分は無力ではなかった。何故なら、進む力を司る白龍の神子なのだから。できたのに、しようつしなかった。だから 今度こそ出来る事をするのだ。白龍の力を使い、戻ってきたこの時空で、今度こそ皆を助けるのだ。

最初にゆきの前から消えてしまったのは『坂本龍馬』だ。寺田屋で奇襲を受け、重傷を負いそのまま。まずは彼を助ける。

ゆきは長い間、留学していたので、日本が歩んだ歴史には疎い。だからゆきの世界にある図書館で、ゆきの世界の『坂本龍馬』を調べようとしたり。だが坂本龍馬について書かれた本は、開いた先から文字が消えて白紙となっていた。これではどうやって助けられないのか解らない。

異世界の幕末に戻り、宿の辰巳屋の湯に浸かり悩んでいると、俄かに外が騒がしい。複数人の足音が、辰巳屋の裏を抜けゆきに入る風呂の窓を通りぬける。その先にあるのは、龍馬の泊まる寺田屋だ。そんな、まさか、『今日』がそうなの!?

早く龍馬に知らせなくては！ 下着姿で飛び出しかけて我に返る。慌てて着替えて同じ宿に泊まる瞬とや都、それからチナミと福地に声をかけて寺田屋に向った。

みんなで戦えば、刺客を倒せる！ 龍馬さんを助けられる！
しかし、寺田屋には既に人集りが出来ていた。

そんな、また間に合わなかったの!?

だが人々の話を聞くと、どうやら坂本龍馬は逃げたらしい。ほつと胸を撫で下ろし、ゆきは龍馬を探す事にした。

「龍馬さん、どこに逃げたんだろう」

ちらりと瞬を見ると、瞬は少し考えてから言った。

「俺たちの世界の『坂本龍馬』は、寺田屋事件の後、薩摩藩邸に逃げ込んだ事になっています」

「じゃあ、早速薩摩藩邸に行こう」

早く坂本龍馬の無事な姿を見たい。その一心で薩摩藩邸へと駆け出す。

「待てよゆき！」

都の声が追いかけてくる。

「待ちなさい！ 夜道は危険です！」

瞬の制止も、ゆきの足を遅めなかった。

「今回ばかりは、八雲や桐生の言う通りだぞ！ 坂本を狙った刺客が潜んでるかもしれないだろ！？」

チナミが追いつき、ゆきの前に立ちはだかった。それにより、ゆきは足を止めるしかなかった。自分の息が随分上がっている事に初めて気がついた。

「ゆきちゃん……気持ちわかるけど、離れちゃだめだよ」

「福地からは離れさせたいけどな！ ゆき、私たちの世界では『坂本龍馬』が死んだのは寺田屋じゃない。だから、こっちの坂本もきつと無事だ。だから……もっと慎重に行こう。この世界は物騒なんだから」

追いついた都も息が上がっていた。

「うん……みんなごめん」

「謝ることは……」

瞬の言葉を遮り、福地とチナミがゆきを背にして武器を構える。

現れたのは

「沖田……」

「……と、土方」

「坂本を襲ったのは新撰組か！？」

チナミの言葉に、土方は自嘲するように笑った。

「お前らも、そんな事を言うのか」

「……モ？」

「お姫様方には関係のない話だ」

的を射ない土方に代わり、静かに沖田が答える。

「僕たち新撰組は坂本龍馬の襲撃命令は受けてません」

「なら……」 チナミは構えを解かず息を飲んだ。

「なんでお前らは……」 それはこの世界で死線をくぐり抜けたとはいえ、平和な異世界からやって来た瞬や都、ましてや心優しいゆきには決して気づかぬ違和感。年齢は下でも、この世に生を受けてからずっとこの世界の戦いに身をおいてきたチナミだからこそ解る気配。

「お前らは……」

言葉が続かないチナミに代わり、福地が続けた。

「ケモノが……起きてるの？」

にいつと口の端を上げ、土方が答えた。

「なあに、昔馴染みに会っただけよ」

「昔馴染み……？」

「お姫様方には関係のない話だ」

さつきと同じ言葉で突っぱねられてしまった。同じように静かな声で沖田が答える。

「僕たちは寺田屋で騒ぎがあつたので、見回りをしているだけです。あなた方こそ武器を納めないのなら 僕たち新撰組が、斬ります」

「やめて！」 チナミと福地、瞬の後ろにいたゆきが、足を震わせ、都に支えられながらも、懸命に声を上げた。

「私たち、龍馬さんを探してるだけなの！ お願ひ、チナミくん、桜智さん、瞬兄、武器を下げて！ それから総司さんも土方さんも、そんな怖い顔しないで……」

「怖い顔……？ 僕がしていると言つのですか？ 僕があなたを怖がらせているのですか？」

「お姫さんが怯えてるぜ。先に物騒なもん抜いたお前らが武器を下

げる」

土方に言われるまでもなく、ゆきに震える声で懇願されては、チナミも福地も瞬も、武器を納めるしかなかった。

「じゃあ、お姫さんを怖がらせているみたいだし、俺らも立ち去るとするか。総司」

「はい。……ゆきさん」 ゆきに振り返った沖田は、いつもの沖田だった。

「坂本龍馬の逃げた先は分かりませんが、坂本龍馬は無事です。今の時も、これからも。だから安心して下さい」

「なんで……そう言えるんですか？」

「今の坂本龍馬には、鬼神の加護がついてます」

「鬼神……？」

「総司、早く来い！」

「はい」

総司はもう一度ゆきを振り返り、深々と頭を垂れると、土方を追いかけ走り去った。

「……なんなんだ、あいつら」

「とにかく、薩摩藩邸へ行きましょう」

ゆきは瞬に手を引かれて行く。

「ゆきちゃん……」

「こら、福地！ お前はゆきに近づくな……！」

福地を追おうとする都を、チナミが腕を引つ張って止めた。

「何だよ」

「さつき、お前は坂本龍馬は寺田屋では死なないと言ったな」

「ああ。私達の世界では『坂本龍馬』は寺田屋から逃げた。こつちの世界の『坂本竜馬』も寺田屋から逃げだせたんだ。だから、こつちの世界のあの坂本も、薩摩藩邸にいる可能性が高いだろ？ 瞬の記憶が間違つてなければだけど」

「その先は？」

都はチナミを振り返らず、無言のままだった。

「さっきのお前は、まるで……坂本は寺田屋では死なないが 他
の所では死ぬみたいない方をしていた」

「……したっけ？ まあ、150年も前の人物だし？ そりゃあ死
ぬさ」

「お前らの世界では 『坂本龍馬』 は、どうなるんだ？」

「都ー！ チナミくん！」

「ほら、ゆきが呼んでいる。行くぞ」

「坂本だけじゃない……オレや兄上……小松殿、高杉殿、沖田やサ
トウ。天狗党、新撰組、長州、薩摩、幕府……この国は……一体ど
うなるんだ！？」

都は振り返らず、ゆきと瞬の元へ走っていく。チナミはぐっと拳
を握り、その背中を追いかけた。

再会

数刻前 寺田屋。

長州藩士と密談をしていた龍馬は、お登勢の知らせで襲撃を知り、寺田屋から逃げ出したものの、手を負傷してしまった。傷は深く、血は止まらず、力が抜けていく。目の前に現れたのは新撰組の土方歳三と沖田総司。

沖田は白龍の神子を守る八葉として行動を共にしたこともあるが、八葉としてというよりも、新撰組として命に従う男だ。以前ゆきに同行した事だつて、同行しろと局長の近藤に命令されての事だ。もし彼が『斬れ』と命令されていれば、斬るだろう。それが同じ八葉の坂本龍馬だろうと 白龍の神子、蓮水ゆきだろうと。

「こりゃあ……絶体絶命、大ぴんちって奴だな……」

「いや、そうでもないさ」
その声は沖田でも土方でもなければ、八葉の誰でもない 懐かしい声。

「出海さん!？」

「久しぶりだなあ、龍さん。それから 沖田に、土方」

「ごわごわの黒髪を無理やり縛り、裾のすばまった袴と鍔のない刀を持つ裸足の男。」

「陸奥……」

見開いた土方の目を、陸奥出海は目を細めて見返した。

「なあ、新撰組は『坂本龍馬』を斬れつて命令されてんのか？」

「……いや。俺たちが命じられてるのは、見回りだ」

「怪しい者は、斬りますが」

「オレはこの『友達』と久しぶりの再会を祝して、これから一杯やりに行くんだ。見逃してくれるよな？」

「ああ……今日は物騒だからせいぜい気をつけるよ」

土方がその場を立ち去ろうとした瞬間 沖田は刀を抜いた。

「おい、総司」

「だって土方さん。近藤さんは怪しい者は斬れと命令しました」

「まあ……確かに怪しい奴だが……」

視線の先にいる『怪しい奴』は「ひでえ言いようだな」とポリポリとゴワゴワの頭を掻いた。

「それに　八年前、江戸で約束したはずです。もう一度、仕合つて下さるんですね、陸奥殿」

「やめろ、お前には斬れない」

「止めないで下さい、土方さん。僕はあれからずっと剣を振っていました。人も人でない者も、斬ってきました。今ならきつと……鬼でも神でも斬れます！」

「無理だ」

「何故です!？」

「もつけない」

「え？」

振り返ると、坂本龍馬も陸奥出海も、そこに居なかった。

「龍さん、どこに向かうんだ？」

出海は、背負った龍馬に話しかけた。

「薩摩藩邸まで頼む。顔なじみがいるんだ。融通も利く」

「解った。……所で龍さん」

「ん？」

「土佐弁、どうしたんだ？」

「土佐弁？　ああ、江戸や京で立ちまわるには、方言だとナメられるし、下手したら言葉が通じないからな。直したんだよ」

「ふーん、そうか……。土佐弁じゃない龍さんって変な感じだな」

あれ？

龍馬はふと違和感を覚えた。

出海さんの前で、土佐弁使った事あったっけ？

龍馬が土佐弁を直したのは 江戸の千葉道場に行く前の事だ。

まあ、細かい事は気にする事ないか。

八年ぶりの再会だ。小松に頼んで薩摩の美味しい酒でも用意してもらおう。龍馬は親友の背でにいつと顔を綻ばせた。

薩摩藩邸にて

八葉の一人、薩摩藩家老小松帯刀を頼り、藩邸に逃げ込んだ坂本龍馬の元に、ゆきたちがやって来たのは、半刻後の事だった。

「ありや、お嬢。それから瞬、都、チナミに福地……何でここが解つたんだ？」

「今から君たちの所へ、使いを出そうと思ったのに」

「龍馬さん！」 ゆきが飛び出し、龍馬に抱きついた。

「よかった！ 無事で……本当に……よかった！」

「あー、こりやあまいったねえ」

自分の胸に縋って泣くゆきを抱きしめるには、観衆が多すぎる。

特に都と瞬の視線が龍馬をザックザクと突き刺してくる。

「どこ行っても、龍さんは女を泣かせるねえ……」

縁側に座って、月明かりの庭を眺めていた男が、こちらを振り返つてにいつと笑った。

「……こちらは？」

瞬の問いかけに、龍馬は男を手招きで呼んで紹介した。

「こちらは陸奥出海さん。俺の江戸にいた頃の親友だ！ 寺田屋から逃げて来た時、偶然再会してな、ここまで運んでもらったんだ」

「まったく、こんなみすぼらしい格好の怪しい男、坂本くんを背負ってなきや 門前払いしてたよ」

小松の嫌味も陸奥出海と呼ばれた男はニコニコと受け流し、ゆきの顔を覗き込んだ。

「あんたが龍さんが言う、白龍の神子なのか？ 見た所、普通の娘さんだけだなあ」

都が慌てた様子でその間に割って入った。

「ふ、普通なわけないだろ！ お前の目は何のためについてるんだ！ ゆきは天使だ！ 誰よりも純粹で、優しく……」

「そうだよ、可憐で清らかで、美しく、儂げで、けども強く温かく

……」

「福地は黙れ！」

憤る都の顔を、出海はじーっと見つめている。

「……何だよ。何見てんだよ」

「お前の顔だよ」

「そりゃ解るよ！　なんで私の顔を見るんだ！」

「……もつたいねえなあ、と思って」

「何がだよ！」

「お前美人なんだし、もうちょっと女らしい格好すりゃいいのに。せめて言葉づかいをもう少しさ……」

時が止まった。ゆきは無意識の内に白龍の力を使ってしまったのかと思った。だが頭の中で「ちがうよ」と白龍の声を聞いた。

そうか、留まる力を使うのは黒龍の神子である都の力だ。じゃあ時を止めたのは都？

『そうだけど、それもちがうよ。ある意味ではそうだけど』
止まった時を再び流れさせたのは。

「な、何故だ……！」　チナミだった。

「何故コイツが女だとわかった!？」

「チナミ……お前殴りたいのか!？」

「だって、町の女たちだって、お前を男だと思い込んで取り巻くんぞぞ!？」

「この男に洞察力と観察眼があるってだけだ！」

「眼つていうか、鼻だな」

「え……?」

出海は両手を都の肩に置き、その髪の毛の匂いを吸い込んだ。

「お前の匂いは、女の匂いだ」

固まった。今度こそ部屋の中の時間が固まった。

すごいなあ、都の力つて。

『神子がそう思うなら、そういう事でいいと思うよ』

そして出海は、次に顔を真っ赤にするチナミを見てにいと笑う。

「お前は女の匂いを知らんのか？　なら嗅いでみる。良い匂いするぜ、この女」

「は……恥を知らええい！」

チナミは真つ赤になつたまま部屋から飛び出した。

「確かに都のフレグランスは良い匂いだけど、こつちに来てつけてたっけ？」

「ゆき、この会話は聞いてはいけません」

ゆきは瞬に耳を塞がれた。

「……まさかチナミは本当に女の匂いを知らんのか？」

「さあ？　元服は済ませてると思うけど」

「ああ、ゆきちゃんの匂いを胸いっぱいに吸い込みたい……きつと甘くて、たおやかで、想像するだけでなんて心地いい……ああ……」
ゆきの目には、口をぱくぱくさせている龍馬と小松と福地しか映らない。

「瞬兄？」

「もういいでしょう」

瞬はゆきの耳から手を離れた。するとテレビをつけたように音声に戻ってくる。聞こえたのは陸奥出海の声だった。

「ま、とにかくお前はもうちょっと女らしくした方が……」

「よ……余計なお世話だ、セクハラ野郎！」

都は出海を突き飛ばし、逃げるようにゆきに駆け寄り抱きついた。

「ゆき、あの男は危険だ！　悪い男だ！　絶対に近づくな！」

「え……でも龍馬さんを助けてくれたし、良い人だと思……」

「絶、対、近、づ、く、な！」

有無を言わせぬ迫力に、思わず「う……うん」とうなづいてしまった。それを確認して、都は出海を振り返る。

「お前も、絶対ゆきに近づくなよ！　絶対に！」

「じゃ、お前にならいいんだな？」

近い。ものすごく近い。鼻と鼻がぶつかりそうだ。

「近い……」

「近いな……」

「ああ、ゆきちゃんにあれぐらい近づけたら……」

瞬と小松と福地の呟きに、ゆきは「あれぐらい普通じゃない？」と首をかしげた。

「さすが陸奥圓明流！ 間合いを詰める迅さは、目にも止まらないなあ！」

龍馬の笑い声だけが部屋に満ちる。都が固まるのはこれで三度目だ。仏の顔も三度まで。仏でもない自分がこれ以上の恥辱に耐える義理などあるだろうか。いや、ない。

「い、いやあああああ！！」

思わずトンファーを繰り出したが、ひよいひよいと避けられる。

しかし、一刻も早くこの男から離れたかった都はそれで十分だった。

「この、セクハラ野郎！ 私にも近づくな！ お前なんか……大っ嫌いだ！」

そう言って、部屋の外へと走り去ってしまった。ゆきは慌ててそれを追う。残された男たちは気まずそうな視線を出海に向けた。

「やれやれ、出海さんはどこに来ても、女を怒らせるねえ……」

「なんでだろう？ 美人でいい匂いがするって褒めてんに。お前らだって、あの女の事そう思うだろ？」

出海の問いかけに、残された男たちは一斉に腕を組む。

「ゆきちゃんの方が……可愛いよ……」

「都に……ですか？ ……あまり、そう意識した事はないです」

「うん、まあ……もう少し女性らしくした方がいってというのは同意するけどね」

「まあ、福地や、昔から一緒だった瞬の意見はともかく、俺も小松の意見に賛成かな」

「ふーん……」

「とにかく」 と小松が咳払いをして、この部屋の妙な空気を戻そうと試みた。

「この通り、坂本龍馬は無事、薩摩藩邸で保護した。今夜はここで

坂本くんを預かるよ。だけどあまり大勢の客人をもてなす準備はしてないんでね、君たちは辰巳屋へ戻ってくれないか？」

龍馬もそれに続ける。

「朝になったら、辰巳屋へ向かうから、お嬢にそう言っておいてくれ」

「わかりました。それでは」

瞬が部屋を出て、ゆきや都、チナミが走り去った先へ向かう。福地は 出海をじっと見ていた。

「ん？ なんだよ？」

「珍しいなあ、福地がお嬢以外の人間を見つめるだなんて」

龍馬の茶化しも聞いてないのか、福地は出海を見つめたまま「人間？」と呟いた。出海はにいつと笑って「修羅だよ」と答える。

「そう……」

福地はそう答えると、ゆらりとゆれる煙のように部屋から去って行った。

「修羅って……まさか君の親友は、怨霊だとも言うの？」

小松の問いかけに、龍馬は笑って答える。

「まさか。出海さんは人間だ。ただ……この世で一番強い男って意味だ」

「ああ、この国でも、違う国でも、な」

不敵に笑う出海の顔が、どこか陰りがあるように小松は感じた。

翌日の朝、辰巳屋に悲鳴が響いた。その主は……都だ。

「な、な、な……なんでお前まで付いてくるんだ！」

都が指さしたのは、坂本龍馬の傍らにいる陸奥出海。

「なんでって、そりゃあオレが龍さんの用心棒だからだよ」

「俺は敵が多い。また今回みたいに狙われちゃ、目的達成に集中できないからなあ。」一応「薩摩藩家老小松帯刀殿のお墨付きだ！」

「賑やかになりそうですね」

無邪気に仲間が増える事を喜ぶゆきを抱きしめ、都は犬のように吠える。

「……絶対に私らに近づくなよ……半径三メートル以内に入ったら、黒龍の力を使つてもお前を……」

「そんな事の為に龍神を使うな、都」

「三めーとるつて、どのくらいだ？」

「大体、二間です」

「冷静に解説しなくていい！ 瞬！」

「……結構嫌われたなあ」

背を向け、ゆきを引つ張つて先に向かう都の背中を見つめながら
出海はポリポリと頭を掻いた。

神子と八葉、そして修羅

出海さんって、面白い人です。龍馬さんとは本当に仲良しで、いつも一緒にいます。まるで私と都みたい！ って言ったら、何故か黒龍の力が発動しちゃうけど……。

瞬兄は出海さんの体を珍しそうに見ています。たしかに凄い筋肉だねって言ったら、そうじゃなくて、医学的に見てとても興味深いとかなんとか。

「おかしい……。体の大きさから割り出される胃袋の大きさより、明らかに食べた物が多い……。一度CTにかけてそれから……」
瞬兄はどこに行っても勉強熱心だね！

それからチナミくんとも仲良くなったみたい。

「な、仲良いもんか！ こいつがちよっかい出すから……」
「いやあ、お前見てると、故郷の弟を思い出してさあ……」

ふうん、出海さんにも弟がいるんだ。チナミくんにもお兄さんがいるし、こうしてみると兄弟みたいかも。チナミ君も、弟と聞いて少し興味を示したみたい。

「……俺に似てるのか？ 俺とおない年ぐらい……なのか？」
「そういえば出海さん、チナミくんのお兄さんと同じくらい……？」
「今……八つぐらいかなあ」

「子供じゃないか！ 俺は大人だ！ ふざけんな！」
ふふふ。チナミくん、あんなに大声出してはしゃいじゃって、嬉しそう。

「出海さん、チナミくんにもお兄さんがいるんですよ」
「ゆ、ゆき、余計な事は言わなくていい！」
「へーどんな？」

ふふ、出海さんも興味を持ったみたい。……そういえば、マコトさんもチナミくんを見る時、こんな目をしていたな。

「出海さんみたいな人です」

「いや、全然違うぞ、ゆき！ お前の目はどうなってんだ！」

「うふふ、チナミくん照れてる」

「照れじゃない！」

「何だ。じゃあオレの事、兄さんって呼んで甘えたっていいんだぜ？ ほら言ってみるよ」

「うおおおお！」

「うふふ、あんなに手足を振り回して子供みたいに喜んでる。よかったね！ チナミくん！」

桜智さんは……

「ゆきちゃん……」

うん、いつも通り！

アーネストには、出海さんの方が興味深々みたい。イギリスの事を色々知りたいみたいだし、アーネストの銃にも興味を持ったみたい。

「へー、ういんちえすたーねえ……形は火縄銃と同じだけど」

「あんな時代遅れの銃なんかと一緒にしないでください」

「イギリスで一番強い奴って誰だ？」

「……女王陛下の事ですか？」

「いや権力じゃなくて、純粹に戦う力の事だよ」

「……さあ、私は軍人ではないので、あまり詳しくはありませんが……。我がイギリス軍は世界最強の精鋭の集まりとも言えますね」

「そうか！ 戦ってみたいなあー！」

「it'a barbarians...」（野蛮人め）

アーネストは野蛮人なんて言ったけど、「戦いたい」と言った出海さんの表情は、アーネストと初めて会った時の高杉さんやチナミ君とは全然違う。きつと外国人を排除するために戦いたいわけじゃないんだと思った。私はうまく説明できなかったけど、解ってくれ

るといいなあ。

高杉さんと小松さんは出海さんの事を知ってたみたい。

「まあ、酒が入る度にさんざん自慢げに言っていたからな」

「そうそう。」俺には凄い友達がいる”って。この話をするとう長いんだ」

「そうなんですか、じゃあ実際会って見てどうですか？」

二人とも、腕を組んで考え込んだ。じゃった。

「……なんていうか……うーん」

「……ある意味想像通りで、ある意味全然違うな」

「でもまあ、まだ戦ってる所は見えてないしね」

「だな……」

そんな事を言っていると、早速怨霊と戦う機会があったのだけど……。

「龍さん、後ろ！」 出海さんの蹴りが怨霊をすり抜けてしまった。

「へ？ あら？」

出海さんに向かって行く怨霊に、振り返った龍馬さんが発砲した退魔の弾丸が当たって消えた。

「出海さん、気をつける」

「はは、これじゃあどっちが用心棒だか解らんなあ……」

ぼりぼりと頭を掻く出海さんに、小松さんの鋭い眼光が刺さる。

「君は馬鹿なの？ 怨霊相手に素手で挑むなんて」

「ああ馬鹿さ。……と、言いたい所だが、これじゃあ龍さんを助けられんなあ……。どうしたものか」

高杉さんが続ける。

「怨霊相手に無手では触れる事すらできん。五行の力を宿した武器でなければ……」

「オレの流派は無手なんだよ」

「腰の刀は？」

「これは包丁だ。鉈にもなる便利な道具だよ。人なんか斬ったら錆

びて刃零れしちまうし……ましてやあんな気持ち悪いモン斬った後に食いモン切るとか、いやだし……」

「貴様、武士の魂を……」

高杉さんは眉をしかめていたけど、小松さんは「なるほど、合理的だね」なんて納得していた。

「でも怨霊を倒せるようになるには、五行の力の武器が必要だし……何か武器をみつくるってみようか？」

「いや。無手で倒さないとオレの……陸奥の名の恥になる」

「君は合理的なのか、非合理的なのかよくわからないよ……」

小松さんはそう言ったけど、出海さんの顔はとても真剣だった。

何か良い手はないのかな……。

「……体そのものに五行の力を宿せないの？」

「無理です」と、瞬兄。

「生身の体では、器にはなりません」

「耐えきれないってだけなら、オレは体の頑丈さには自信あるぜ？」

「いいえ、人体には流れがあります。摂取したものは必ず排出される。生身の体に力を宿しても、いずれ体外へ抜けてしまいます」

「……そういうもんなのか」

「なら……出海さんのバンテージならどうかな？」

「ばんてえじ？」

「出海さんが、腕や足に巻いてる布の事です」

瞬兄も「なるほど」って言ってる。

「それなら、素手で怨霊に触れられるかもしれない」

「じゃ、試してみよう。出海さん、私と手を繋ぎましょう」

「ダメだ！」

都が私の手を握って、出海さんとの間に割って入った。

「ゆきに触るな！」

「手を繋がないと、五行の力を宿せないよ？」

「なら五行の力なんて宿さなくていい！」

「でも力が無いと、出海さんは怨霊と戦えないし……もしかしたら

怨霊に」

「こんな奴、とり殺されても知るもんか！」

「都……」

神子、その男に五行の力は宿せないよ。

白龍の声が頭に響く。何故？ 何故、出海さんは宿せないの？

その男は八葉じゃない。神子が力を与えられるのは、八葉と対の黒龍の神子だけ。

じゃあ、今だけ九葉になったり……できない？

無理。八人と決められているから。

じゃあ出海さんは……五行の力を使えないの？ 怨霊と戦えないの？

その男が武器を持てば戦えるよ。この世界の武器には、作られる過程で五行の力が宿るものだから。

でも出海さんは、武器を持ちたくないって。

じゃあ、怨霊とは戦えないよ。

そんな……じゃあどうすればいいんだろう。白龍は何も答えなかった。

「ゆき、どうした？」

都の声で、我に返り、白龍から言われた事を皆に伝えると、出海さんは「そうか」と言って残念そうに笑った。

「すまん、龍さん。怨霊からは守れそうにない」

「ま、小さな怨霊程度なら俺の敵じゃないさ。出海さんは人の悪意から俺を守ってくれている。なら俺は怨霊から出海さんを守るぜ！」

龍馬さんが大きな音を立てて、出海さんの背中を叩いた。

「ああ、じゃあ頼むぜ、龍さん！」

出海さんが叩き返すと、龍馬さんが咳き込んだ。でもなんだか嬉しそう……。いいなあ。私も皆から守ってもらってる分、皆を守れたらいいのに。

その後、菊千代さんを長州へ連れて行く事になって、護衛として

新撰組から総司さんが仲間に加わった。でも……。

「まさか沖田も八葉だなんてなあ……」

「陸奥殿も……いるんですか？」

沖田さん……またそんな怖い顔……ううん、総司さんだけじゃない……。出海さん……なんで……あんな顔の総司さんを前にして、笑っていられるの？

「沖田ア！ 解ってるだろうな」 土方さんが怒鳴った。

「そいつと仕合うのは、お預けだ。命令だぞ」

「……はい」

「陸奥、お前もあんな沖田を煽るなよ」

「オレは何もしてないさ」

そう言っただけで出海さんは背を向けた。でも、相変わらず総司さんと出海さんの間にはピリピリとした空気が流れていて……すごく怖い。だから思わず、移動中に私は総司さんに「出海さんと仲良くないんですか？」と聞いてみた。

「仲良く……？ 質問の意味が解りません」

「出海さんの事はどう思ってるんですか？」

「……前に、チナミとあなたとで話をした時、チナミに言われました。 ”お前は斬れるものと斬れないもので物事を見ているのか”と。そういえば、そんな話をした覚えはある。 総司さんはよく覚えてるなあ。

「僕はそんな事ありませんよと答えました。 ”斬っていいものと、斬ってはいけないもの”。僕には、その二つしかありません。でも……あの男は……”斬りたい”んです」

「え……」

総司さんの顔は 笑っていた。その顔は、子供たちと遊んだ時、お姉さんや、新撰組の仲間の事を話するときのような 笑顔。

「命令でもなく、人の善悪でもなく、ただ純粹に斬りたい……いいえ、斬るんです。僕が」

なんで、そんな顔でそんな怖い事を言えるの？

「もしかして……出海さんは、総司さんにももの凄く悪い事をしたんですか？」

「いいえ。僕は昔、彼に負けたんです。江戸に居る時にね。女性には……特にゆきさんのような心優しい女性には、解らないかもしれませぬ」

確かに、総司さんの言っている事が私にはわからない。でも……。

「喧嘩は、しないで」

「ええ。あなたの見ている所ではしません」

そう言った総司さんの顔は、やっぱり穏やかな笑顔で　私は何も言えなくなつて、不安を内に抱えたまま、その顔をただ見つめるしかできなかった。

* * *

「坂本」　名を呼ばれ、龍馬は立ち止り、瞬の隣へと並んだ。瞬は声をひそめて言う。

「前に、お前はこの世界に怨霊は居て当たり前だと言っていたよな？」

「ああ、産まれる前からずーっといたぜ？」

「……陸奥は、この世界の人間、だよな」

「ん？　そりゃそうだ。陸奥圓明流つつたら、知る人ぞ知る幻の流派！　八百年も前から続いているんだ」

「そつか……」

「もしかして……瞬の世界には陸奥圓明流はないのか？　そっちの世界にも俺や、高杉や、小松はいるんだろ？　出海さんは、いないのか？」

「……聞いた事はないな。しかし俺の専門は歴史ではない。俺が知らんだけかもしれん」

「もしかしたら、歴史つちゅうより武術の方がもな」

「ならなおさら詳しくはないな。フェンシングや剣道はやっていたが……こつちの世界の実践剣術に比べれば、子供の手習いのようなものだ。相手が怨霊や陽炎のような、五行の力で戦う相手だからこそ通用する」

「そうか。じゃああつちに行ったら、図書館で調べてみるのもいいかもな！」

「……ああ」

「出海さんの子孫があつちにいるかもしれんのか！ ……まだ嫁さんも貰ってない友達の、子孫の事を知るなんて。くくく……帰ったら、からかってやるぜよ」

「ぜよ」？

「いかん、土佐弁が」

龍馬が照れながら手で口元を隠した時、誰かから前方で呼ばれ、慌ててそちらへ向かう。瞬はその背中を見ながら、龍馬に話かける前よりも一層疑問が深まった事を感じた。

この世界で、怨霊の存在は当然。なら何故……陸奥は素手で怨霊に向かって行った？

陽炎

長州で大量の怨霊に足止めを食らい、その怨霊を操る長を探していた一同の前に立ちふさがったのは。

「あ……兄上……それから……皆」

チナミの兄、マコト。陽炎……死してなお動く傀儡人形となった天狗党の者たちだった。

「そんな……俺が、命令に従えば……兄上を助けると言ったのに……！ 兄上、俺です！ チナミです！」

陽炎となったマコトは弟の言葉も解らずに、一同に襲いかかる。天狗党の者たちもそれに続く。一人一人がそれぞれ腕の立つ者なのだ。今までの敵とはわけがちがう。

「くそ、数が多い……銃が二丁どころじゃ全然足りん！」

「……でもあと一丁あった所で、どうやって撃つつもりですか？」

「こんな時に冷静にツッコむなよ、沖田！」

「お前ら、やめろ！」 チナミが両手を広げて立ちはだかる。

「こいつらは……俺の……俺の……！」

「チナミくん、あぶない！」

「ゆき！」

チナミを庇おうとしたゆきに皆、意識を持っていかれた。だから気付かなかった。坂本龍馬の背後に陽炎の一人がいた。

「龍さん！ 後ろ！」

出海の蹴りが、陽炎に 入った。

「あら？」

一番吃驚しているのは出海自身だったが、すぐに不敵な笑みに戻ると構えの態勢に入った。

「……よくわかんねえが、こいつらになら、オレの業が効くんだな！？」

「ハハ、そりゃいいや！ コレで俺らに適う奴はいなくなった！」

英国艦隊だろうと、百鬼夜行だろうと怖くねえ！」

龍馬と出海は背中合わせになると、同時に叫んだ。

「援護は任せた！ 龍さん！」

「援護は任せるぜよ！ 出海さん！」

「英国艦隊も怖くない……？ 聞き捨てなりませんね」 目の前で

縦横無尽に動き回る出海と龍馬を見て、アーネストも銃を構える。

「英国は味方なんですからね、一応……！」

「陸奥圓明流、その業……しかと見せてもらおうぞ……！」

高杉も飛び出した。

「光荣だね、陸奥圓明流と共闘できるなんて。武士なんてって思っていたけど……今回だけはその古臭い血筋を誇りに思つ事にするよ……！」

小松も武器を構え、立ち向かう。

「ゆきちゃん……！ キミの為に！」

福地は相変わらずだった。

「やめろ……やめてくれ！」

チナミは相変わらず、手を広げていた。

「チナミ、どいて下さい」

対するは刀を抜いた、沖田総司。

「それは、敵の長です。斬り伏せなければ……怨霊はなくならない。先に進めません」

「チ……ナミ……」

その声は、チナミの後ろにいる陽炎から聞こえてきた。

「兄上……！ 意識が……！」

「チナミ……どけ……！」

チナミの兄、マコトが刀を構え、その白い目で……わずかに残った意識で見ているのは……沖田、ではなくその後ろの 修羅。

「兄上！ 俺の事が解るんですか……！」

「……ああ、だから……早く……どいてくれ！ あれは……陸奥なんだらう？」

「兄上、あいつを知っているんですか？」

「あの男は……知らん。だが技は、伝え聞いた事がある……。陸奥と戦わせてくれ！ 陽炎としてではなく……一人の武人として……死なせてくれ！」

ああ、そうか……。

ゆきは都と瞬に守られながら、陽炎たちを見ていた。死してなお、安息を許されず、無理やり起こされ、戦い続けさせられる傀儡。そんな悲しい姿しかないと思っていた。だが、目の前にいる陽炎たちは 何故か皆、陸奥出海へと向かって行くのだ。陽炎たちの襲撃の目的は 天海の言葉が本当なら 八葉の排除の筈だ。なのに八葉ではなく、陸奥出海へと向かって行くのだ。腕や足をちぎられ、首を折られた姿になっても、だ。

天狗党は志の高い 意志の強い男たちの集まりだ。だからこそ強い陽炎となる。しかし、だからこそ。

私が、浄化するのは……。

ゆきが涙を流したのは、おぞましい姿の陽炎たちへの恐怖でもなければ、悲しい陽炎たちへの同情でもない。ただただ純粋に、目の前の光景が美しいと感じたのだ。

「ゆきっ！ どうしたんだ!？」

「大丈夫だよ……都」

陽炎としてではなく……武人としてのあなた方を、浄化するんですね。

「めぐれ、地の声」

マコトの突きを、出海が体を反らし、刃を避けた。右手を床につけ、バネのように跳ねあがり、足で顔を貫く。しかしマコトはそれを避け、逆さの胴に向かって刃を払おうとした瞬間、出海の足が返って、首の後ろ 延髄を刈った。

「かの者を封じよ！」

まばゆい光が、全てを満たした。その光が消える瞬間、チナミは兄の姿を見た。陽炎ではなく、チナミが慕い、尊敬し 時には嫉

妬し、からかわれ、悪戯し、怒られ、共に笑いあつた兄の姿だ。

「チナミ、あとは任せたま」

「……はい、兄上」

光が治まり、再び元の景色が戻つた時　そこにいるのは、神子と八葉……そして一人の修羅だつた。

「すげえな、これが神子の力かよ」

「なんの、出海さんの技も相変わらず凄いや！」

「……坂本、土佐弁……」

「あ」　龍馬が照れ隠しのように頭を掻きながら、話題を変える。

「でもなんで、陽炎には出海さんの技が効いたんだらうなあ」

「恐らくは……」　人”　だつたからだらうね”　小松が答えた。

「陽炎は人の死体で作られた人形。怨霊とは違って生身の人間の体があつた。そして　彼らには、”人”としての強い意志が残つてたよ。人が人である理由は何？　姿？　それとも精神？　どちらにせよ、彼らには両方が備わつていたよ」

「立派な最期だつた。同じ武士道を志す者として誇りに思う」

高杉も、そう呟いて刀を納めた。

「外国人の私には武士道なんて解らないけど……」　アーネストが銃を下して、天を見上げた。

「……彼らの強さは嫌いじゃないよ」

「ゆきちゃん……今回もすご……き、綺麗だつたよ……」

福地は相変わらずだつた。
「僕もそう思います、チナミ」　沖田が膝をつくチナミの肩に手を置いた。

「僕たち新撰組とは思想は違えど……立派な人たちでした。最期まで呪詛に屈せず、人として尊厳を保ち、武人として逝きました。僕も　ああんりたい」

「沖田……お前……」

言いかけた言葉は、都の叫びにかき消される。

「ゆきつ！　大丈夫か！？」

大きな力を使ったゆきは、都に支えられて立ってるのがやつとだった。

「うん、大丈夫」

「大丈夫じゃありません。一度、俺たちの世界に戻りましょう」

「大丈夫……まだ長門で残った怨霊たちを浄化しないと……菊千代さんが……」

「菊千代なんてどうだっていい、私はゆきの方が……」

「待って八雲くん。その発言は薩摩家老として見過ごせないな」

そこで少し都と小松で揉めたが、結局は長門へ向かう事になった。

長門へ行く途中、川棚温泉宿にて。

夜風に吹かれ、チナミは一人月を見上げていた。陽炎となり、浄化されていく瞬間の兄や、天狗党の仲間たちの顔は……とても満ち足りていた。でも本当に 満足していたのだろうか？

人の気配に振り返ると、坂本龍馬と陸奥出海が温泉に向かって廊下を歩いている所だった。

「おー、チナミじゃねえか」

「お前も一緒に入るか？」

「……陸奥」 ヘラヘラと上機嫌な二人にも伝わるように、できるだけ真剣な顔と声で尋ねた。

「兄上は……天狗党は……強かったか？」

出海はヘラヘラと笑っていた口元を、ニイと引き締めて「ああ」とだけ答えた。

「思い出すだけで、背筋が凍えるぜ。あと一步踏み込まれてたら、斬られてたかもしれねえ」

「でも……兄上はたった一撃で……」

「一撃じゃない。一回、避けられたんだ」

「え？」

「……陸奥圓明流、弧月……から、裏弧月。あの突きは圓明流の技で避けた。そうでないと倒せないと思っただからだ。本当はあの突き

を避けた時点で蹴りが入る筈だったんだがな、それを避けられた。だから裏まで出した」

「なんだ！ 俺が前に出海さんに負けた技に、まだ先があったのかよ！ ちえ……チナミ、どうやらお前の兄貴は俺より強かったみたいだぜ？」

「坂本……よりも？」

「と、言っても八年前の俺だぜ？ あの頃は刀振ってたし……」

「へえ、銃を持った龍さんはもっと強いのか。じゃあまた勝負してみようか？」

「勘弁しとくれよ出海さん。自分の乗る船の船長を殺す気か？」

「冗談だよ、龍さんが人に銃口向けるなんて出来やしないってのは解ってる」

「俺は臆病だからな」

「優しいだけさ」

チナミは二人のやりとりを見ながら沸々と胸の奥から何かが湧きあがるのを感じた。

「そうか、兄上は……強かったんだな！」

「ああ……。そう言えば、お前と同じ攻め方だったな……」

「え……？」

「お前も強くなるぜ。兄貴と同じくらいには。でも兄貴を超えなきゃ、あと一歩踏み込め。それが出来るようになったら、お前とも仕合ってやってもいいぜ」

「じゃ、チナミ。俺たち先に入ってるぜ！」

「お、おう！ 俺もすぐ行く！」

チナミは一度、ゆきたちのいる大部屋に戻って手ぬぐいや着替えを用意してから浴場へ向かった。その様子にゆきは顔を綻ばせた。

「よかった。チナミくん、元気が出てきたみたい」

「まだ子供だね」と小松たちは笑った。

その後、長門に巣食う大量の怨霊を浄化した後、力を使いすぎたゆきを休養の為、一度ゆきたちへの世界へと戻る事になった。

「あ、でも……出海さんはどうなるんだ？」

龍馬の呟きを聞いたゆきの頭に、白龍が答える。

その男は八葉でも、神子の世界の住人でもない。だから連れてはいけないよ。

「出海さんは……お留守番みたいです」

「そっかー。残念だなあ、出海さんの好きそうな物いっぱいあるのに」

「ん？ 何の話だ？」

「俺たちはちよつと姿を消すけど、なあに、光の先に行けばまた会えるから……ちゃんと辿って来てくれよな！」

「お、おい龍さん！？ どういう意味だ……」

突然開いた空間に、ゆきたちが吸い込まれていく。穴は小さくなり、光の玉になると東の空へ飛んで行った。

「……やれやれ、また置いてけ掘りかよ、龍さん。いいぜ。何度だつて見つけてやるよ……。一緒に世界を回る約束、果たしてもらえらるまで」

出海は光が飛んで行った東にむかって、一步、また一步と踏み締め歩いてきた。

時空の先で

ゆきの世界は相変わらず砂にまみれていた。束の間の休息の間、瞬と龍馬、チナミは三人で図書館に向かう。

「チナミも調べものか？」

「ああ……この世界での俺たちがどうなったのかを調べに。お前らは？」

「俺は、この世界でも陸奥圓明流があるのかを調べにな。出海さんの子孫の話を見つけたら、からかってやろうと思っただけだ。」

うしししし、と悪戯を思いついた子供のように笑う。だが、図書館の歴史の本は相変わらず白紙だった。前は坂本龍馬の本だけだったのに……高杉や新撰組の本もチナミが本を開いた先から白紙になった。いや個人だけじゃない。幕末以降の歴史書、全てが白紙になっているのだ。

「どういう事だ？ ……天海や崇の言う”合わせ世”が進行しているという事か……。」

チナミは龍馬と瞬を探した。龍馬を見つけたのは”スポーツ”と看板が下げられている一角だった。

「おい、そっちはどうだ？」

「うーん、ないなあ。俺の北辰一刀流、薩摩の示現流、沖田の天然理心流について書かれた本はあるけど、陸奥圓明流はどこにも……。」

話をしているうちに、瞬もこちらにやってきた。

「瞬は何を調べていたんだ？」

「俺も陸奥圓明流についてだ。」

「どこで？」

「……郷土研究」

「なんでだ？」

「陸奥という名、そしてあの身体能力。もしかしたら風土や民俗学関連で研究されてるのではないかと思っただけだ。でも……なかつた。」

「そうか……こつちの世界に陸奥圓明流はないってことか。寂しいなあ……。そうだ！ あつちで俺が出海さんの本を書いてやるう！ 出海さんと世界を回る放浪記！ 陸奥圓明流が名実共に世界最強になるまでを描いた”るぼたーじゅ”！ 題名は何にしようか……。修羅って文字は使いたいなあ……」

「修羅？」

「ああ、修羅の如き強さだろ？ 時代を駆け抜ける修羅……。修羅の刻……。作、坂本龍馬……。お？ 良いじゃないか？ くうくう！ たまらんなあ！ うん、そうしよう！」

「世界を……回る？ あいつと？」

「ああ、約束したんだ！ 俺が黒船を手に入れたら、船の用心棒として出海さんを世界に連れていくってな！」

「そうか……」

「……チナミも、一緒に行くか？」

「え？」

「世界がどんなものか、日本を代表して、その目で確かめてみるんだよ！ 攘夷派のお前がやってこそ、意味のある役目だと思うぜ！ 全部終わった暁には、小松に頼んで留学生として俺の船に乗り込め！ な？ 良い考えだろ？ よし、そうと決まれば早速小松に……」

「ま、待て！ 俺はまだ何も……」

止めようとしたチナミの手は空しく宙を掻いた。溜息をついてその手で頭を掻く。

でもまあ……。

チナミの脳裏には、ある光景がはっきりと映った。大海原を颯爽と進む坂本龍馬の船。その舳先に座り、真正面から潮風を浴びる船長の坂本龍馬、その傍らに陸奥出海……。そして自分。

悪くはない、と思う。

「待てよ、坂本！」

すでに黒い点になろうとしている龍馬の背中を、チナミと瞬は慌

てて追いかけた。

* * *

再びゆきたちが異世界の幕末に来た時……。

「うわああああ！」

すぐ目の前に、温泉に入っていた陸奥出海がいた。

「あー、龍さんたちかよ。熊か何かかと思っただぜ」

「うん驚かして悪かった、出海さん。取りあえず構えを解いてくれ

……」

「……ご婦人方がいるんでね」

ゆきは瞬に目を塞がれ、都は背中を向けて肩を震わせていた。

温泉から上がり道着を着直して、出海は龍馬たちの待つ大きな木の下に向かった。ゆきは瞬に目を塞がられたせいかわ、何も見えなかったように平然としていたが、都は一人、木の反対側にいて姿を見せようとしなかった。

「まあ、取りあえず話を進めさせてもらうよ」と、小松が出海に尋ねた。

「ここはどこ？」

「京の山奥だよ。って、オレはお前らの光を追って来たんだぜ？」

「……どこに出るかは、こちらからは解らないんだよ。で、私たちが消えてから、どのくらい経ってる？」

「うーんと、大体半月、かな？」

「長州から、京までたった半月で来たっていうのか！？」

チナミの驚嘆に出海は「そうだぜ？」としれっと答えた。

「……上様はどうなったか、解る？」

「ん。無事に向こうに行っただけ。こないだの怨霊大群みた

いなものじゃなけりや、新撰組の敵じゃないさ」

出海の言葉に、こころなしに沖田の顔がほころんだ。

「そう……」 小松もほっと胸をなでおろす。

「じゃあ今日はひとまず、京に泊まるう」

そして日光へ行き、天海を 。小松の台詞は途切れたが、その次に続く言葉は、皆が解っていた。

「じゃあ、私は薩摩藩邸に行くよ」

「俺は長州藩邸だ」

「僕は英国大使館へ戻ります」

「僕も……頓所へ」

「みんな、一緒の宿に泊まらないんですか？」

「わ、私はゆきちゃんと同じ宿に……と、とま、とま……」

福地の台詞は聞かなかつた事にして、きよとんとしているゆきに龍馬が答える。

「まあ、この人数が一つ宿に泊まったら目立つし、何より部屋が用意できるかわからんな」

「そうですね……じゃあ私たちは、いつもの辰巳屋に泊まりますね。龍馬さんは……また寺田屋ですか？」

「いや、寺田屋には一度迷惑かけてるからなあ……中岡が近江屋にいるから、そっちにいるよ」

「近江屋……？」

大木を挟んだ反対側にいる都の呟きは、誰にも気づかれなかった。

「わかりました。じゃあ出海さんも……？」

「ああ、俺は龍さんと一緒にいるよ」

そう言って出海は、ゆきにニイっと笑い返した。

近江屋事件

都はこつちの世界に戻ってから、あまり喋らなかつた。しかし辰巳屋へ戻ると、都はゆきとチナミ、福地に気付かれぬように、そつと瞬の腕を引つ張つた。

「なあ……坂本龍馬が暗殺されたのつて確か……」

「近江屋だ」

「なんで教えてやらなかつたんだ！」

「気づいていたなら、都も同じだろう？」

「私は……自信がなかつたし……曖昧な記憶で忠告しても混乱させるだけだし……」

「正しい判断だ」 瞬は声を更に潜め、続ける。

「坂本龍馬は確かに近江屋で暗殺された。しかしそれは今の時期ではない。いや、そもそもこの世界の時間軸は俺たちの世界とは違う。俺たちの世界の歴史の知識など、ほとんど役に立たん」

「でも史実通り、寺田屋から坂本は逃げ出したじゃんか！」

「……おりょうさんに助けられたわけじゃ、ない」

「あ……」

「それから何よりも、坂本龍馬と新撰組の沖田総司、薩摩家老の小松帯刀と長州の高杉晋作が行動を共にしているなんて、俺たちの歴史からは考えられない」

「……瞬は不安じゃないのか!? 坂本龍馬が……暗殺されるかもしれないのに！」

「何故そこまで不安になるんだ？」

「だって坂本は、ゆきを守る八葉の一人だろ? 一人でも欠けたら、ゆきを助けられなくなるかもしれないだろ？」

「本当にそうか？」

「え……?」

都が一瞬、言葉を失う。その様子に瞬はクスリと笑つた。

「何を笑ってるんだ！」

「いや、さっきの……。この世界に戻って来た時のお前の様子を思い出してな。随分女らしい、初心な態度だったな」

「そりゃ、私は女だからな！　女が女らしい態度を取って、何が悪い！」

「悪くはない。なるほど、あいつは確かに洞察力と観察眼があつて、鼻が効く」

「な、なんだよ……。どう言う事だよ……」

「お前は可愛い女だつて事だ」

「か、か、可愛いつてのは、ゆきの為にある言葉なんだよ！　私が可愛いとかねーよ！　馬鹿じゃねーの！？」

「いや、今のお前は凄く可愛いと思うぞ」

「ば……。馬鹿！　瞬の馬鹿！　そんな事言つて話をはぐらかそうつたつて、ダメだぜ！？　瞬が行かないつーんなら、私一人でも坂本の所行つて忠告してくるからな！」

「坂本の所……。じゃなくてももう一人の所じゃないのか？」

「セクハラ野郎の事はどうでもいい！」

宿から飛び出す都の背に向けて「陸奥の事とは言つてないんだがな」と呟いて、こっそり様子を窺っていたゆきとチナミを振り返つた。福地はそんなゆきを見ていた。

都が近江屋に向かうと、陸奥出海が屋根の上にいるのをみつけた。珍しく、一人だ。都の住む世界よりも大きく見える夕日に、シルエツトとして浮かぶ、男の逞しい身体。ゾクリと体が震えたのはその姿に見とれていた事に気付いたからだ。

私が、その体を持っていたら……。あの男のような力を持ってい

たら、もつとゆきを守れるのかな？

男の恰好をいくら真似ても自分は女だ。女の華奢な体に男の筋肉はつかない。男のような一撃は出せないのだ。男のような力が欲しい。男に生まれたかった。そう思い初めた頃、憧れた体が、理想の力が……あそこにある。一撃で相手を沈める、鬼のような強さ。

ば、馬鹿……あいつの裸なんて思い出してんじやない！ やめろ、私の頭！

「お？ 都じゃねえか！ おーい！ 都おー！」

出海が自分を呼ぶ声で我に返った。

「なれなれしく呼び捨てにするな！」

「じゃあ……、都ちゃーん！」

「ちゃ、ちゃん、とか……！ もつとなれなれしいだろ！ 馬鹿じ

やねーの！？ 名字だ！ 私は八雲都。八雲と呼べ！」

「オレがその名を呼びながらお前を口説くと、何かおかしな方向になる予感がするから、やだ」

「何の話だよ！ あと口説くってなんだよ！ 口説くなよ！」

「まあ、お前は都なんだから、都でいいだろ？ 都」

「人の名前を連呼するな！」

「こつち来いよ、都。良い景色だぜ？ 一緒に見よう」

「人の話聞けよ！」

「なんだ、登れないのか？ ちょっと待ってる」

出海が屋根から飛び降りると、都の目の前に着地する。そして都の体を片腕で抱えた。

「お、おい！ 馬鹿！ 何すんだ、セクハラだぞ！」

しっかりと体を抱えられて、抵抗もできなかった。その態勢のまま出海は片腕で窓や雨どいを伝い、再び屋根の上に戻った。

「ほら、絶景だろ？」

そう言っただけで出海は夕日に染まる京の街並みを指さした。都は、絶景というのはものすごく高い所から見る景色の事だと思っていた。近江屋の屋根の上など、周りの建物とさして変わらない。どちらか

といえば、都にとつては低い方だ。だが 刻を告げる寺の鐘を聞いて、家へ走り帰る子供たちの声。夕飯の支度をする匂い。カラスの鳴き声。伸びる影。それは都の世界にもあつたものだ。たとえ時代が移り、建物が変わっても、きつといつまでも変わらない景色。今日を生き、明日への期待に満ちた人々の夕日に照らされた笑顔がよく見えるこの場所は 確かに絶景だ、と思った。この瞬間を切り取って留めておきたいぐらいに。

「ああ……いい景し……」 そこで、ハタと我に返る。

「い、いつまで私の体に触ってるんだ、馬鹿！」

「いや、支えておかないと危ねえかなと思って」

「いらない！ 離せ！」

「はいはい」

出海は都を離すと、屋根の上に座つた。都は立つたままだ。二人とも黙つたまま、しばらく夕日を眺めていた。

「……なあ」 声をかけたのは、出海だった。

「お前も神子なんだろう？」

「ああ、ゆきの対の、黒龍の神子だ」

「で、龍さんたちは、白龍の神子を守る八葉なんだろう？」

「ああ」

「黒龍の神子を守る、八葉はいないのか？」

「……え？」

吃驚して振り返ると、出海は相変わらず夕日を見ながら続けた。

「八葉じゃなくてもいい、一人でもいい。もしもお前を守る存在があるんなら……オレを選んでくれ」

「……そ、それは……」 顔が火照るのは、多分西日のせいだ。都はそう太陽に責任転嫁して、夕日を睨みつけながら続ける。

「黒龍の神子を守る八葉は……ない、と思う。それがあんなら、瞬や、黒龍自身が教えてくれると、思うし……」

「そうか……」

「それに私は守られなくてもいい。守られたいんじゃない、守りた

いんだ。白龍の神子　　うっん、私の親友、蓮水ゆきを」

「なるほど」

「何がなるほどだよ」

「理由がわかった。オレがお前の事が気になる理由」

「え　　」

心臓が、耳に来たのかと思った。鼓膜のすぐ近くで心音が響く。

「オレもさ、龍さんを守りたいんだ。時代の寵児としての坂本龍馬じゃなく、ただの気のいい親友の、龍さんをさ」

「……なんで、守ろうとするんだ」

「約束したんだよ。オレの夢は世界を回って、オレが世界最強だつて証明する事。龍さんの夢は、黒船で世界中を回る事。オレは船が必要で、強い。龍さんは船を持っているが、身を守る物が必要。持ちつ持たれつだろ？　まあ、それよりも何よりも、龍さんと一緒にいるのが楽しいからな！　……お前だつてそうじゃないのか？」

「私は……ゆきにいろんな物を貰った。いろんな事から守ってもらってばかりだから……貰った物を返す為に……守られていた分、守りたいのに……黒龍の神子になっても、黒龍はまだ未熟だし……ゆきを守っているのは、いつも八葉のあいっらで……！」

「お前は神子さんと一緒にいるのは、楽しくないのか？」

「楽しくないわけないだろ！」

「神子さんは、お前といてどう思ってると思う？」

「そ……それは……」

都にはいつも守ってもらってるよ……。だから、無理しないで。ゆきは、いつもそう言っつて悲しそうな目で笑っつて都を見る。もしかしたら失望されているのかもしれない。そう思われてたら　　怖い。

「オレの目には、神子さんはお前といるのが一番楽しそうに見えるけどな」

「え……？」

いつの間にか俯いていたらしい顔を上げれば、出海の真っ黒い大

きな目がまっすぐ都を見ていた。

「はつきり言うぜ？ 神子さんを守るのはお前じゃなくてもできる」
「なっ！」

「あんだけ周りに腕自慢の男がいるんだ。お前がどんなに腕に自信があるうが、戦う事に関しては女は男に適わなねえよ」

「そういう台詞は、私と戦ってから言え！」

都はトンファーを抜いて出海の頭に振り下ろした。だが 途中で止まった。出海がトンファーを掴んだからだ。しかし、それは予想していた事だ。間髪いれずにもう片腕のトンファーを横から薙ぐ……が、それは払われ その動作で腹へと伸び 一寸前でピタリと止まった。

「……解つてると思うが、オレは本気じゃないぜ」

嫌でも解る。出海は胡坐をかいたまま、膝も立てていないのだから。座ったままの態勢では力も込められず、速く動く事もできないのは、武術をしていた都はよく知っている。出海に握られたままのトンファーは、引き抜こうとしてもびくとも動かなかった。

「でも……高杉から一本取った事だって……！」

「指導、つて言葉知ってるか？」

「瞬よりも速く動けるし！」

「桐生の武器は両刃剣だ。お前の動きとはそりゃ違うさ」

「技の多さなら……小松よりも……」

「小松の薙刀は動作が大きい分威力がある。小技に頼る必要はない」
「福地よりも、正確に急所をつける！」

「確かに福地の武器で急所を狙うのは難しい。だが動きを封じたり、かく乱したり、他の奴の攻撃に繋げる事ができる」

「さ、坂本やアーネストよりも前で戦ってる！」

「アーネストや龍さんの銃は、後方援護だろ？ それにアーネストはともかく龍さんは前に出られないんじゃないやなくて、出ないだけだ」
「チナミよりも背が高い！」

「そりゃ事実だが、それでもチナミは強いぜ？ お前より力はある

し、お前より速い」

「……」

「んで、沖田は」

「……もういい！」

トンファーは依然出海に握られたまま、びくともしない。

「何で……私は……こんなに弱いんだ！ 強くなりたいのに！ ゆきを守るくらい、強くなりたいのに！」

「女だからだよ」

「女だから弱いなんて言うな！」

「女だから弱いとは言ってない。女だから男より強くなれないだけだ」

「なら……最初から男に生まれてれば……」

「最初から男だったら、神子さんはお前とあんなに仲良くしなかつただろうなあ……」

「え……？」

出海の言葉の意味を問いただそうとする前に、再び出海は口を開く。

「もう一度言っぜ？ 神子さんを守るのは、お前じゃなくてもできる」

「でも……！」

反論の言葉にかぶせるように、続けた。

「神子さんは、お前に一度でも守ってくれと言った事があるか？」

「ないよ！ 私が……守る力がないから！ だからいつも悲しそうに私を見るんだ……」

「違う！ よく思い出してみろ。いつも神子さんがお前に何て言っていたのか」

ゆきの顔が浮かぶ。楽しそうな笑顔、開いた口が告げる。いつもの言葉。

「都は私の親友だよ！」

「親友つてのは、対等な存在って事じゃないのか？ 神子さんとそ

つぽ向き、後ろの窓から建物の中に入ろうとした。ニヤニヤと笑う坂本龍馬と目が合った。

「いつから見てた……?」

「割と最初からだなあ。出海さんが、お前を見つけて呼んでた時から」

都は無言でトンファアを構えた。その妙に落ち着きを払った態度に似つかわしくなく、怒りに涙ぐむ目。龍馬は平静を装いつつもじりじりと後ずさった。

「待て、都。俺と中岡は身分を隠して泊まってる身だ。頼む……ほたえな!」

この気持ちの正体? そんなもの解っていたじゃないか。この男の事を考えると胸が締め付けられるのも 夜、寝る前に顔が浮かんで離れないのも !

「嫌いだ……。陸奥なんか……ついでに坂本も、嫌いだあ!!!」

「中岡、逃げるぜよ!」

都のトンファアは美しい軌道を描いて、龍馬の額を一文字に薙いだ。

「……大は、つかなくなったな」

出海の眩きは、近江屋で暴れる都には届いてないようだった。

決戦前夜

翌日、陸奥出海と頑なに目を合わせようとしない都と、額に大きな包帯を巻く坂本龍馬以外は特に異常はなく、一同は日光へと向かう。そして明日はいよいよ天海の待つ東照宮へ行くために、最期の宿に泊まった。

いつものように出海が坂本龍馬の部屋のすぐ上の屋根に横になっていると、誰かが近づくと気が配がした。桐生瞬だ。

「……珍しいな、お前がオレに何か用か？」

「確かめておきたい事が二、三あってな。お前は明日俺たちの戦いに一緒に来るのか？」

「ああ、龍さんの行く所なら、どこだってついて行くぜ」

「……だが相手は神だ。五行の力を扱えないお前が役に立つとは思えない」

冷酷にも聞こえる瞬の言葉に、出海は気まずそうに笑いながら頭を掻いた。

「はつきり言うねえ。でも、そう言うの嫌いじゃないぜ？ そうだな……たしかに今回の敵にはオレはどうかう出来そうにない。でも……オレはオレのやれる事はするよ」

「例えば？」

「さあ？ それは行ってみない事にはなあ……。でもまあ、足を引っ張るつもりはないし。神子さんには“賑やかになる”って歓迎されたし、別にいいだろ？」

「……いい加減な奴だな。坂本そっくりだ」

「だから親友なんだよ。そう言うあんたは龍さんと正反対だ」

「だからこそその対だ」

「ふーん、そういうもんか……。で？ 他にも質問あるんだろ？」

お前が聞きたいってのはこう言う事じゃねえだろ？ という風にニイッと笑う。

「……ああ」 瞬は切れ長の目の奥にある炎のような目で出海を捉えた。

「お前は……この世界の人間か？」

出海はしばらく何も答えなかった。静寂に、瞬の静かな声がよく通る。

「この世界の人間は、あの世界にもいる。そっくり同じ人物ではないが……。坂本も、沖田も、高杉も、小松も、福地も、あちらの世界に名前がある。チナミは……ないが、天狗党はあちらにもあるし、サトウも名はないがイギリスが日本に関与していたのも事実。サトウのような立場の者はいただろう。だが……お前はいい」

「じゃあ、チナミやアーネストみたいなもんなんじゃねえの？」

「いや。坂本龍馬の側に陸奥という人物はいたが、武闘派じゃない」

「それだったら小松や福地だって、本来なら武闘派じゃないだろ？」

「何故知ってる？」

あ、という風に口を押さえる出海に、瞬はたたみかける。

「それにお前は、この世界の初めから存在する怨霊が、どういう物か知らなかった。何故だ？」

「あー、ほら……オレは山奥で生まれ育った田舎者……」

「山奥の方が、強力な怨霊がいる」

出海はそっぽ向いたまま、ぼりぼりと頭を掻いた。

「……嘘が下手な男だな。俺も違う世界から来たんだ。仲間なら隠す事はないだろう？」

「……オレにもよくわかんねえ事態だったから、説明すんのがややこしくてなあ」

「お前はどうかやってこの世界に来たんだ？」

「……さあ？」

「さあ……って」

「毎日、海を眺めてたんだ。あつちでオレは坂本龍馬を守れなかった。オレが離れなければ守れたかもしれない。坂本龍馬は死ななかつた。オレは龍さんと一緒に、黒船乗って世界を眺めてたかもしれない

ないのに……見えるのは江戸の小さな海だ。なにもかもどうでも良くなつてな。ぼーっとしてたら……後ろから斬られちゃった」

「お前が、か？」

「ああ、誰だか知らんが、薄れていく意識に、凄く慌てた声で呼びかけられてたよ。あんまりしつこいんで、うるせえよ！ つつたら……この世界の京の裏路地にいたんだ。斬りつけられた筈の背中は無傷。見廻り組が刀構えて取り囲んでてさ。どうでもいいと思つてても、勝手に体が動いちゃって。フラフラさ迷つてたら……龍さんがいたんだよ。寺田屋から逃げてきた、手を怪我した坂本龍馬がさ！ だからやり直せると思つてさ！ 今度こそ……龍さんを助けられるつてさ！！ その後、神子だの八葉だの、わけわかんねえ事になつてたけど……でもまあ、龍さんが楽しそうにしてるし、神子さんも良い子だし、まあいいかつて思つてさ。オレの技は怨霊にや効かないけど、あの神子さんが龍さん守ってくれるんなら、オレはオレの拳で殴れる奴だけ相手してりゃいいかつて思つてさ……オレの張りつめてた気も、だいぶ楽になった。全く、凄いな神子さんの力は」

「白龍の力に……そんな効果は……」

「いや、だからあの神子さんの”蓮水ゆき”の力だろ？ ポヤンポヤンしてるくせに、自分の出来る事をしようとしてる。そんな姿見てりゃ、オレもできる事だけすりゃいいやつて思えて来てさ。……

まだまだガキっぽいけどよ、これから良い女になるぜ？」

「お前……」

「怖い顔すんなつて。思つた事を言つただけさ。怨霊相手なら神子の加護のある坂本龍馬は死なない。でもな……この世界でも人は損得で動くもんらしいな。坂本龍馬、小松帯刀、高杉晋作。死ねば得する者が多い奴が、三人も揃つてる……。いや、四人か。白龍の神子もその一人らしいぜ」

瞬は出海の視線の先に、蠢く影を見つけた。怨霊ではない。怨霊なら、都が気づくはずだ。だが。

「オレの役目は、この世界にもあるんだ。さ、あんたは怪我しねえうちに、自分の役目に戻りな」

「……しかし、一人では……」

「今まで一人でやって来たぜ。大丈夫、宿の敷居は跨がせない」

「今までって……まさか 長州でも、京でも？」

出海はニイっと笑い、屋根から闇へと飛び降りた。

神との戦い

日光、東照宮。そこに天海がいる。が、その前に三猿「ましら」が立ちふさがった。

「ゆき……先に進め！」

ましらの前に、都が立った。

「ゆきは進む力の白龍の神子だろ！？ 私は留まる力の黒龍の神子。こんな奴ら私にここに留めてやる！」

「でも……」

「早く行かないと、合わせ世が完成しちゃう！ 天海の力に対抗するには白龍の神子の力と、八葉の力が必要なんだ！ だから早く！」

「でも都一人じゃ……」

「一人じゃねえよ」 都の隣に、出海が立った。

「こいつら、人の姿をしてるって事は怨霊じゃねえんだろ？ 怨霊じゃねえって事は、オレが触れられる……陸奥の技が効くって事だ」

「でも……」

「お嬢、行くぞ！ 出海さんがいれば、都は絶対大丈夫だ！」

龍馬に手をひかれて、ゆきは何度も振り返りながら東照宮への階段を登って行った。

「……陸奥、お前は坂本の用心棒なんだろ？ 坂本と一緒に行かなくていいのか？」

「それはお前も一緒だろ？ 神子さんを守りたいなら、何で離れるんだ？」

「理由は……お前と一緒にだよ」

「そうか……」

お互い、ニイッと笑いあい……構える。

「ゆきは八葉に守られてる」

「龍さんは神子さんの加護がある」

「だから、大丈夫だ！！」

しかし、ましてらの動きは人を超えていた。否、動きの速さだけで言えば、出海だって常人を超えている。しかし出海とて人だ。相手は人の姿をしているが、人とは違う。都が黒龍の力を使い、ましてらの動きを止める。だが相手も神に近いモノ。ただでさえ未熟な上、二つの世界を支え続けている黒龍では、一瞬しか動きを止められない。だが、それで十分だ。腕を掴む事さえできれば、極め、折り、投げ、蹴る。口を塞がれているましらは声も無く叫び、土人形のように崩れた。耳を塞がれているましらは、その声なき悲鳴を聞きつけ、まっすぐに飛びかかる。どんなに速くても、軌道さえ読めれば、放った蹴りはこめかみに叩きこまれ、反対側の足で間髪いれずにもう一発くらい、風に吹かれるように散って行った。

強い、強いな……陸奥。

私にその力があれば、とは、もう思わない。自分には自分だけの力がある。目を塞がれているましらが放つ炎の術。五行の力のない出海では対抗する術がない。だが、水の気を持つ自分なら相殺できる。

「陸奥、伏せるオ!!」

伏せた出海を飛び越え、気を放ち、炎の海を飲み込み……。

クソ、攻撃を食らわせるには、距離が足りない!

着地の瞬間、足の下には出海の手があった。

「都、もう一度……飛べ!!」

こんなに高く飛んだのは、小さい頃、遊技場でトランポリンをした時以来だなと、思った。

「うおおおおおおお!!」

雄たけびと共に、上空からトンファーに込めた水の気を、ましてらの頭に叩き込んだ。炎が水で消されるように消えていく。都が再び立ち上がると、出海の笑顔があった。

「……やった、やったよ陸奥!!」

「ああ、さすがだぜ! 今までの女の中で、都が一番だ!!」

「え……」

「ありや？ 言葉が足りんかったな……オレが今まで出会った女の中で、都が一番強い！」
「……言い直さなくていいのに」
「ん？ なんつった？」
「だからお前はモテないつったんだ！ 馬鹿！」
「なんでだよ」
「うるさいな！ ゆき達が待ってるんだから、行くぞ！」
都は東照宮への階段を駆け上る、その後ろを出海は頭を掻きながらついて行った。

* * *

都と出海が東照宮の堂に入った時、天海は白龍の神子と八葉によつて時空の狭間へと消えかけていた。

「神子……私の、光……」
天海が伸ばした手にゆきが触れようとした瞬間、時空の穴が天海とゆきを飲み込んだ。
「ゆき！」

ゆきの手を掴んだのは、都だった。黒龍の力を使い、閉じかけた穴を留めていた。

「ゆき！ そいつの手を離せ！」

「だめ！ 天海も助けるの！ もう誰も……消えたりさせない！」

私が 皆を助けるの！」

「……つたく、わがままな天使だなあ……」

しかし、都も限界だった。徐々に都も天海とゆきと一緒に時空の穴へと飲み込まれていく。

ゆきが皆を助けると言うのなら 私がゆきを助けるから

誰か、私を。

強い力が、都の手を掴んだ。

「陸奥……」

「く…… すごい力だなあ…… 悪い、都…… 手加減出来そうにねえ……」

万力の如き力が都の手首を締め上げる。握る手の中で、骨が悲鳴のような音を立てた。

「構うもんか。思いつきり引いてくれ！ ゆきをを助けるためなら

……この腕が潰れても構わない！」

「よく言ったあああああ！」

ズズズ……と都の手が穴から出てくる。しかし、穴は黒龍の力をもつても少しずつ閉じて行く。このままでは腕だけを残して穴が閉じてしまいかもしれない。

「龍さん！ 助けてくれ！」

「おう、出海さん！」

龍馬の手が伸びて、都の腕を掴み、引っ張った。

「坂本……」

「頑張れ！ お嬢の手を離すな！」

「言われなくてもそうする！」

ズズズ……と都の肩、頭が出てきた。顔は痛みで真っ青だが、歯を食いしばり、痛みに耐えていた。痛いと叫べばきつと、ゆきは優しさから都の手を離してしまう。しかし 腕が折れる痛みが、都の意識を奪いかける。

「八雲！ しっかりしろ！」

チナミが肩の下に手を伸ばし、ぐっと引っ張った。

「チナミ…… それセクハラ」

「せくはら？ どういう意味だ？」

「…… 終わったら教えてやる」

ズズズ……と都の腰まで出てきた所で、小松が駆け寄った。

「八雲くん、女性の腰を掴む失礼を、今だけは許してね」

「ああ、今回だけだぞ」

小松が腰を引いて、ようやく都の足も引きぬけた。だがもう片方の腕はまだ穴の中。

「八雲、力を貸そう！」

高杉が都の腕ごと、ゆきの手を引いた。穴の奥から、ゆきの声が聞こえる。

「都……腕、大丈夫なの？」

「ああ、都の腕はあとで俺が着てやるから……」瞬が、ゆきの手を引っ張り、片腕を穴から出した。

「お前は今、穴から出る事だけ考えろ！」

「ゆきさん、痛いかもしれません……少しの間我慢してください。すぐ済みます」

沖田がゆきの腕を引き、上半身を引きずり出す。

「ゆ、ゆきちゃん……大丈夫!？」

福地が顔を赤らめながら、その腰を更に引いた。続いて、最後に残ったもう片方の腕を、アーネストが引いた。

「ゆき……もう無理です、天海の手を離して下さい！」

時空の穴はもう、ゆきの腕の大きさしか残っていない。しかし、それでもゆきは天海の手を離そうとしなかった。

「いや！ あんな暗い所に置いていけない！」

「神子……もういいのです」穴の奥から天海の声が静かに優しく響く。

「神子が、私を助けてくれようとした。それだけで十分です。……それに私は、そちらの世界では影です。そちらに出たとたん、消えてしまう だから、どちらにせよ私はもう消えてしまう運命なのです。合わせ世と共に」

「何か方法があるはず！ 天海、諦めないで！」

「……ゆき、本当に……天海を助けたいのか？」

都の問いかけに、ゆきは迷いなく、強く頷いた。

「わかったよ、私の天使。その願い叶えてやる。だから 天海の手を離せ」

「え……」

「黒龍が方法を教えてくれた。だけど説明する時間が無い！ 早く

手を離すんだ！ 腕が向こうに行つたまま穴が塞がれば……ゆきの腕が切断される！ 頼む、私を信じて、天海を離せ！」

もしかしたら方便かもしれない。事実、神である天海ですらその方法がどんなものか解らない様子だった。けれど。

「わかつた。都を信じるよ！ 天海……絶対、助かるからね！」

ゆきが天海の手を離し、穴から引き抜いたとたん、穴が縮んで、消えてしまった。

「いや、消えてないよ。封印されたんだ。」

穴のあつた虚空に、必死に手を伸ばすゆきに、都が優しく声をかけた。

「……目視できないくらい小さな穴が開いたままだ。穴が開いたままなら、天海がいる時空の挟間は、私らの世界とこの世界の間に留まれる。黒龍の力を長い間持続させるには、今はその大きさが限界。たまたま八葉の力が、相生の順に注がれたから負担もなく出来たらしいぜ」

「じゃあ……天海は、消えないんだね！」

「……ああ、この世界の未来も無事。私らの世界も元に戻る。そして……合わせ世の未来も、この小さな穴の向こうで続いている」

「でも、それじゃあ、やっぱり天海は向こう側でひとりぼっちになっちゃうの？」

「いや、黒龍の力が回復して、本来の力を取り戻せば……穴は広げられる。その時に、回復した白龍の力を使えば 　またあいつと出会える事もあるかもな」

「そう……」

ゆきは再び目を戻す。どこにあるのかは今は解らない時空の向こう側に呟いた。

「天海、いつかまた……会おうね……」

別れ

天海の合わせ世を時空の挟間に封印した事により、三つの世界がそれぞれ守られた。それは奇跡としか言いようのない偉業なのだが、本人たちはその自覚はない。ただその時、自分が出来うる事を全うしただけの事なのだから。それが評価されるのは、刻を超えた遙か未来。それが歴史が刻まれる瞬間というものなのだろう。

「それじゃあ……私たちは、私たちの世界に帰りますね」

「ああ、お嬢。俺たちは俺たちの世界で残された役目を全うするぜ。そしたら 胸を張って会いに行く！」

神子と八葉が時空を超えられるのは、あと一度だけ。ここに留まるか、向こうに行くかは本人たち次第。皆、自分たちの世界に、それぞれの立場がある。だから彼女たちは、再開を約束しあい、一度別れる事になったのだ。

「陸奥……」

ゆきと別れを惜しむ八葉たちを、少し離れた所から見守っていた出海の服を都が引つ張った。その片腕には痛々しい様子で、当て木と包帯が巻かれていた。

「都、すまん。怪我させちゃって」

「謝んなよ。礼を言おうとしたのに。まあ向こうに行けば、怪我は直ってるって龍神が言っただから気にすんな」

にいつと歯を見せて都は笑ったが、すぐにしゅんと目線を落とすた。

「……お前は、私らの世界に来れないんだよな」

「まあな。でも龍さん達は行くみたいだな。置いてきぼりは少しばかり寂しいけどよ、でもまあそれまでは龍さんと世界を回れるし！」

これからの未来を目を輝かせて語る出海に、都の「留まっちゃおうかな」という言葉は聞こえなかったらしい。

「お前もさ、向こうに行ったら、こっちはもう来れないんだよな」

「うん……」

「寂しいなあ……」

その一言は眉を八の字に下げ、しょんぼりとした目で本当に寂しそうに言ったので、都はそれで満足だった。その瞬間、視界が光で覆われる。もう向こうに帰る時間らしい。

「うそ……もう時間!? 陸奥に礼をしたかったのに……」

「気にするなよ。でもまあ礼をしてくれるっつーんならさ……お前の世界に、もし陸奥を名乗る馬鹿がいたら……その馬鹿が腹でも空かしてたら、握り飯でも作って食わせてやってくれよ」

「……わかった」

「その時は女らしい格好してくれよ? そいつきつと大喜びすんぜ? オレの血筋は代々美人にや目がねえからな!」

「ばーか」

光が都を包み込み、時空の向こうへと飛ばす瞬間、都は最後に言葉を残した。

「陸奥……あんたの事、散々ケチヨンケチヨンに言ってたけどさ……」

…嫌いじゃないぜ」

「そうか。嫌われたままじゃなくてよかったよ」

そして、都たちを包んだ光は、空の向こうへと消えて行った。

「……行っちまったな」

その先を見上げてた出海が、龍馬に背中を叩かれた。

「よし、出海さん! 長崎行くぜよ!」

「……長崎?」

「長崎で、アーネストが船を安く売ってくれるよう、向こうの商人に掛け合ってくれるっちゅう!」

「私は通訳するだけです。交渉はMr坂本がして下さいね」

「わかつちゅう! チナミも一緒に来るぜよ!」

「俺も……?」

「俺の船で留学したらどうかって、前に話しただろ? 小松がおまんの後見人になってくれるちゅうから、小松が推薦した使節として

船に乗れる！……な、小松？」

「まあね。君は簡単に言ってくれたけど、結構骨を折ったんだからね。だからその分、チナミに学んで来て貰わないと私の苦労が浮かばれないね」

「は……はい！ 国の為、粉骨碎身の覚悟で、学んで来ます！」

「道中でアーネストが英語を教えてくれるっちゅうし、前途洋々ぜよー！」

「……坂本」今まで黙っていた高杉が無表情で口を挟んだ。

「土佐弁が出てる」

「ありゃ？ やっぱ土佐弁じゃ、変かのう？」

「いや、龍さんらしいと思うぜ」

「出海さんがそう言うなら、ま、ええか！ わしの生まれは土佐じやき！ 生まれた土地の言葉を大事にできなけりゃ、よその国の言葉も大事にできん！ だからこれからは土佐弁で行くぜよ！」

「そういうもんですかねえ……」

「小松もこれからは、故郷の言葉使え！ ほれ、試しにこれからの予定を薩摩言葉で」

「……おいは、西郷がおる京の藩邸に戻るでござす」

「ぶははは！ 似合わんのう！」

「君、馬鹿にしてるの？」

「……わしゃあ一度、長州に戻るけえ」

「た、高杉！？ 君まで何してるの！？ 君も馬鹿だったの！？」

「ぶはは、いいぞ高杉、その調子じゃ！ 沖田は？」

「僕は頓所に戻り、次の命令が出るまで待機してます」

「……けーわいじゃのう、沖田。ここは故郷の言葉で喋る流れじゃ」「じゃあ……てやんでいべらばうちくしょうめ。……これでいいですか？」

「うわっ、そんな棒読みな江戸っ子は初めて見たき！ 福地は……」

「いないよ。ゆきくんが居なくなったとたん、泣きながらどこかへ飛んでったよ」

「まさか……あんなかつこつけた別れ方しといて、もう向こうに行つたとか？」

ありえないと言えない所が福地という男である。

「んじゃ……わしたちもそろそろ、お別れかろう？」

たとえ共に戦つた仲間とはいえ、ここを離れば、彼らの役目、彼らのすべき事が待っている。再び敵味方に分かれる事にもなるだろつ。

「そつだな……じゃあ」

男たちは同時に背を向け、それぞれの道へと向かった。

『向こうで、会おう』

見つけた

「本機は間もなく、成田空港に到着します」
都が目を覚ますと、飛行機の中に居た。

「あ！ 都ちゃん、やっと起きた！」
隣には崇の不安げな顔があった。

「崇！ お前……！」

「な、何？ 都ちゃん……怖い顔して！ そりゃ起こす為にほつぺた叩いたり、鼻をつまんだりしたけどさあ……なかなか起きない皆が悪いんじゃない」

「皆……？」

「あ、都も起きたんだ！ おはよう」

「ゆき、立ち上がらないでシートベルトをつけて下さい」

前の座席にゆきと瞬がいる。全て夢だったのだろうか……。そう思ったが、崇が呟いた。

「都ちゃん、ありがとう……合わせ世を留めてくれて」

「え？」

「お姉ちゃん、お菓子食べるー？」

「こら崇、席を立つな！」

崇はすぐにいつもの様子に戻ったが、都には、それが天海の言葉に聞こえた。

礼を言われるのは私じゃない。ゆきがそれを願ったから、私はそれを叶えただけ。礼を言われるのはゆきだ。

でもまあ……悪い気分ではなかった。

礼と言えば……。

ふとあの世界で出会った、もう二度と会えない男の事を思い出して。あいつにもいつか、礼が言えるんだろうか。飛行機が成田について、降りる時にもそう思っていた。

「都、帰って来たね！ 私たちの国に！」

ゆきが腕を取る。そうだ、帰って来たのだ。日本に　自分の生きるべき世界に。

もし、黒龍の神子に八葉みたいなのがいたら……あいつに見せてやれたかな？

この空港の様子。日本人もイギリス人も、黄色人、白人、黒人、ありとあらゆる人種が、世界中から集まったこの場所を。荷物を受け取り、ロビーへと向かう。そこには家族や友人、恋人を待つ人々でさらに溢れていた。

「うわあ、お父さんとお母さん見つかるかなあ」

「電話してみましょう」

瞬が電話している間、ゆきと崇、都はキョロキョロと見渡した。

都はすぐ隣にいた母子が目に入った。赤毛で白い肌の女はハーフだろうか、我が子と手を繋ぎほほ笑む姿はまるで。

ゆきが天使なら、この人は天女……かな？

「お父さんまだー？」

「もうすぐ出てくるって」

親子の会話を何気なく聞いていると、ゆきが腕をひっぱった。ゆきの両親の居場所がわかったらしい。

「都、行こう」

「ああ」

歩き出した都の背中に、母子の声が響いた。

「あー！　お父さん来たー！　おみやげー！」

「おかえりなさい、出海さん！」

振り向いたが、親子はもう人に紛れて見えなくなってしまうていた。

「都、どうしたの？」

「……別に、どうも」

都はゆきの手を取って、瞬と崇の後ろを駆け足でついて行った。

数カ月後。

図書館で調べものをしていたゆきは都が座っていた席の隣に座った。しばらくそれぞれ本を読んでいたが、都がゆきに肩に手を回し、一緒に本を覗きこんだ。

「何を調べてるんだ？」

「あの時代の事」

「ふーん、ところでゆき……」

「なに？」

「……あそこで変な男がお前をじーっと見てるんだが……」

「え？ もしかして桜智さん？」

「いや、知らない奴」

「なんだ、桜智さんじゃないの……」

「残念がるな。っていうかお前も福地を変な男って認識してたんだな……。ほら、あそこの高校生だよ……」

都がこっそり指さした先には、制服姿の男子高校生が、本に隠れこつちを窺っていた。

「つたく、ずーつとゆきを見やがって」

「……違うよ、私を見てるんじゃないよ。都だよ」

「はぁ？」

ゆきはクスクス笑いながら、都の髪をひと束指に取った。

「やっぱり、都は長い髪も似合うよ」

「そうか？ まあ、お前が長い髪の子を見たいと言ったから……」

「あとはスカートもはいたらいいと思う」

「スカートなんて、スースーして風邪ひいちゃうよ」

ゆきはクスクス笑って、何も答えず、別の質問をした。

「都は何の本を読んだの？」

「私も、ゆきと一緒に。あの時代の事を調べてたよ」

「そっか……皆どうしてるかな？」

「元気にやってるよ、きつと」
「でも……」

ゆきは史料に目を落とす。あの世界はこちらの世界の過去とは違う。そう思ってもやはり気がかりだった。坂本龍馬は暗殺され、沖田総司と高杉晋作、小松帯刀は若くして病死。福地は長生きしたよ。うだが、チナミやアーネストは名前すら見つからなかった。

「大丈夫。みんなとはまた会えるさ。あいつらが、あいつらの世界でやるべき事をすべてやったら」

「うん、そうだね」

都は自分の持ってきた本を閉じた。

「都は龍馬さんの本を見てたの？」

「ああ……」

正確には、龍馬の周りにいた人物についてだ。

瞬には聞いていたが、やっぱり名前は無かったな……。

それに万が一、あいつがこっちでも坂本龍馬の側にいたら……坂本龍馬は暗殺なんかされないはずだ。しかしそんな感傷をぶち壊す、能天気な声が図書館中に響いた。

「お姉ちゃん！ 都ちゃん！ 見て見て！」

「祟！ 図書館で大声出すな！」

祟が顔が隠れるほどの本を抱えてこちらにやってくる。

「日本の図書館って凄いね！ 漫画まであるんだ！」

「祟、持てる分だけ持ちなさい。転ぶぞ」

瞬がそう言ったとたん、盛大に転び、本がゆきたちの足元まで飛んできた。

「大丈夫、祟くん」

ゆきがそう言いながら、足元に転がった漫画を手にとって「きゃ」と小さな悲鳴を上げた。

「どうした、ゆき」

「この表紙の男の子……血を流してる！ 瞬兄、どうしよう！ 手当しないと……」

「あはは！ お姉ちゃん、馬鹿みたい。それ漫画だよ？」

「崇、ゆきにこんな漫画見せるな！」

「都ちゃんも大げさだなあ。漫画の中の奴は現実には存在しないし、出来事だって本当に起こった事じゃないんだからさあ！」

「図書館で騒ぐな」

瞬にコツンと小突かれて、崇は大げさに頭を押さえて黙った。ゆきは震える手でページをめくり、今にも泣きそうな声で呟く。

「うわ……表紙の男の子、いっぱい殴られてるよ……？ どうしよう、助けなきゃ！」

「大丈夫だって、ゆき。漫画の中の事は、人も出来ごとく架空なんだ。ゆきが心を痛める事はない」

都はゆきから漫画を奪い、パラパラとページをめくる。そしてあるページでピタリと止まり、目を見開いた。そしてゆっくりと細める。

「……こんな奴を、ゆきが心配してやる必要はないさ」

そしてパタンと閉じて、その本で崇を小突く。

「ほら、本片付けるぞ！ これ、どこにあったんだ？」

「うん、あっち」

崇はしぶしぶ、漫画を拾い始めた。都はもう一度表紙を確認する。額から血を流してなお、正面を睨み、決して諦めない目をした少年。その上に題名が書かれている。その題名は

一巻から読んでみるか……！

『修羅の門』

おまけ

岸壁に、刀を持ち立ちつくす女がいた。和服を着ているが、その容姿は異国人そのもの。鳶色の瞳からとめどなく涙を流していた。

沖田様のいない世界は、地獄そのものです。

慕っていた男を亡くした。病の進行を止めることはできず、最期まで一緒にいるしかなかった。沖田総司は異人の血の混じる彼女を綺麗だといった。天女のようなと言ってくれた。だがもう彼はこの世にはいない。異人の血の混じる彼女を、そんな風に言う男はもう、この世界にはいない。咽ぶ彼女の耳には、岸壁にぶつかる波の音が、彼女に対する罵声のように聞こえた。しかしその波間に 彼女の 名を呼ぶ声が聞こえた。

「え……」

耳を澄ませ、岸壁の遙か下の荒ぶる海を見つめる。確かに聞こえた。

「沖田、様？」

いや、その声は焦がれ慕った男の、あの儂くも優しい声とは似ても似つかない。しかし自分の名を確かに呼んだ。こっちに来いと言った。この世界には、もう自分を受け入れる者はいない。ならば自分を求める、この力強くも荒々しい、どこか温かい声の主の元へ。

こっちに来い、蘭！

「はい！」

刀を固く握りしめ、地面を蹴って荒ぶる海へと飛び込んだ。

蘭が目を覚ますと、そこは沖田総司の看護をしていた、あの屋敷。自分と布団で寝ていた。

夢、だったの？

しかし自分の手の中にはしっかりと沖田の刀がある。どういう事

なのか怪訝に思いながらも、おそろおそろ沖田の部屋に行けばあの傍げで優しい笑顔がそこにあった。

「ああ、蘭さん。おはようございます」

やはり夢だったのだ。蘭は胸を撫で下ろし、いつものように沖田に「おはようございます」と挨拶を返した。

「蘭さん、僕の刀を取って来て下さい」

「え……」

沖田の視線の先には、木から降りれなくなった黒い子猫がいた。

「そんな、正夢だと言うの!？」

夢の中の沖田は、黒猫を枝を斬って助けると……血を吐いて倒れ、それつきり。

「ああ、もう持っていたんですね」

そう言っただけで笑い蘭の手から刀を奪うと、あの時と同じように枝を斬って子猫を助ける。しかし、血を吐く事もなく、子猫を膝の上に乗せて、縁側に座って撫でていた。

「刀を握ったのは久しぶりです。でも 衰えてはいない」

「沖田様……」

「新撰組としての僕の役目は果たしました。あとは あの人が僕との約束を果たしてくれて、僕は彼女との約束を果たすだけです」

「……あの人が？ 彼女？ 彼女って……誰ですか？」

「そうですね……。純粹で、健気で。でも芯の強い方です。僕は彼女に出会って、初めて感情というものを知ったのです」

そんな話は、蘭は初めて聞く。そして自分に向ける笑顔とは違う笑顔を見るのも。その瞬間に悟ってしまった。

沖田様は、その女性を……。

目の奥が熱くなり、勝手にこぼれそうになる涙を、必死で耐えた。「彼女は今……どこに？」

「……この世界には、もういません」

「え……」

「だから僕が僕の役目を終えたら……彼女の世界へと行くんです。」

そう約束しました」

「じゃあ、じゃあ……この世界では……」

私と一緒に……。

喉の奥の痛みで、うまく言葉が紡げない。沖田は相変わらずの穏やかな顔のまま、続けた。

「でもあの人は……本当に約束を果たしてくれませんかえ」

「あの人……？」

「全く……あの人だったら名前の通り、まだ海に出たままなんでしょうか。まさか僕との約束を忘れてたりして」

「忘れるわけ、ねえだろ？」

庭先から聞こえた男の声に振り返る。裸足。先の窄まった袴。腰に差した鍔のない刀。ゴワゴワの髪を無理やり縛った男。初めて見るはずのこの男の声は、どこかで聞いた事があった。

「吃驚したぜ。ちよつと薩摩の方を巡っていたら、お前が倒れたって噂を聞いてさ……。で、どうなんだ？ 病気は、治ったのか！？」

「……治りました」 沖田は目を細め、穏やかに笑いながら刀を抜いた。

「約束を、果たして下さい」

「お、沖田様！ おやめ下さい！」

「止めないで下さい、蘭さん。これは 僕がこの世界で最後に、沖田総司として”すべき事”ですから」

言葉を失うほどの緊迫感の中、蘭は五月の空から粉雪が舞う幻影を見た。二人はお互いの出方を探るように動かない。先に動くのは沖田総司かそれとも名も知らぬこの男か。

沖田様、どうか……死なないで！

自分はきつとこの仕合を見届ける為に呼ばれたのだ。蘭は知らずうちに姿勢を正しこの勝負を見守る事にした。それが きつと自分が必要です事なのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2181w/>

遙かなる刻の中で

2011年8月28日22時21分発行